

結婚



カーテンを閉めて下さいますか？夕日が眩しくて…。どうやら、うとうとと夢を見ていたようでございます。遠い昔に、私が嫁いだ日の夢でございました…。

嫁いだその日、主人に連れられて辿り着いた住まいは、川沿いの崖の上に、まるでしみつくように建っていた、農家の古びた納屋でございました。その前の年までは東京からの疎開者が住んでいたとかで、朽ちかけた板戸を開けると、じめじめと薄暗い納屋の隅に擦り切れた畳が六枚敷いてありました。

家具や調度品などは、何もございません。数日前に私が鉄道貨物で送っておいた鏡台と布団、衣類を詰めた柳行李が、畳の上に申し訳なさそうに並べてありました。主人が用意してくれていた物と言いましたら、使い古しの鍋釜と蜜柑の木箱が二つ…。片方の木箱は『ちゃぶ台』に、もう片方を『本棚』にするとの事でした。『ちゃぶ台』の上には、男物と女物の、さすがにこればかりは真新しい茶碗と箸が買い揃えてありました。薄暗い納屋の中で、明かり取りの窓から差し込む春の陽射しに、茶碗と箸が、まるでスポットライトでも当てたかのように輝いていたのを、鮮明に覚えております。

「ままごとみたいだな…こんな家しか借りられなくて。ヨツちゃん、勘弁な。」

私の動揺を察した主人は、明るく言って咳払いをひとつ…。照れた時の癖です。私が黴臭い畳の上に正座して両手をつくつと、慌てて主人も正座をして向かい合いました。

「ふつつか者ですが、宜しくお願い致します」まるで、お芝居のような挨拶をして、私は深々と頭を下げました。

「こちらこそ宜しく。俺は…今は、ヨツちゃんが呆れるくらいの貧乏だけど、いち足すいちを三にも四にもしたいと思ってるんだ。ここが双六の振出しだ。これから二人で、駒を進めて行くこうな」

膝の上に重ねた私の両の手を主人の掌が包むと、若草の息吹を含みながら川面を渡って来る風が窓から吹き込み、上気した頬を優しく撫でて行きます。昨夜の雨で増水したとい

う豊かな川音だけが、二人の胸に響いていました。

電気が通じているのは母屋までという事で、戸口には菜種油の煤けたランプが置いてあり、煮炊きは『へつつい』で、飲み水は、農家の井戸から貰えるとの話。御不浄は、農家の外にあるのを使わせていただく事や、洗濯は川まで降りる事…。主人からの説明を聞いていたところで、目が覚めました。

すこし寝汗をかいたようでございます。結婚してから六十年が経ちますのに、今でも時々、嫁いだこの日の夢を見るのでございます。本当に何も無い貧しい私達夫婦が、どうにか人並みに、二男一女を育て上げ、生きて来たのが夢のようでございます。

『貧乏』という言葉、私は決して嫌いではありません。もはや私などは、家計を切り盛りする立場ではありませんし、明日の命も知れない病床の身の上でございますので、このように呑気な事が言えるのかもしれないけれど、私とて二十代から四十代の頃までは、『貧乏』という、ずっしり重い手枷足枷を付けた毎日。晴れ渡る見込みのない、どんよりとした灰色の雲を、頭上にいただく日々を過ごして来たのでございます。

主人は田舎の田畑ひとつ持たない、長屋住まいの貧しい家の長男でしたから、貧乏は覚悟の上の結婚でございました。いえ、終戦後まもなくの話でございますので、日本中が貧乏といえば貧乏。しかし、これ程までの貧しさとは夢にも思わなかった私は、純情一途に愛情だけを頼りにして、この人の許にと…嫁いで来た己の世間知らずを、笑うしかなかったのでございました。

私は生れも育ちも東京の渋谷。関東大震災の前年、戌（いぬ）の生れ。父は千葉の農家の次男坊。下級役人でございましたので、決して裕福な暮らしではございませんでした。それでも一人っ子だった私は、私立の女学校に進学させてもらえたのでした。小学校の五年で、心臓を患っておりました母が他界した後、私が女学校を卒業するまで再婚をせずにおりました父との、侘しい二人暮らしでございました。

母親の居ない暮らしは、寡黙な父を、より一層無口にし、食事中などは無言の行。娘として相談に乗ってもらいたい事も話せるような雰囲気ではございません。けれど一時、父の表情が明るくなった事がありました。父の職場の若い女性が、休みの日に家に訪ねて来るようになったのでした。若さに溢れた優しい女性で、私は姉のように慕いました。

その人がいるだけで、家の中に暖かな空気が流れるのが私にもわかりました。私はその

人から、初潮を迎えた時の手当ての仕方などをそつと教えて貰ったのです。その女性が、母になってくれたらどんなに良いだろうかと、夢見たのですが、先方の御両親の涙ながらの反対に会い、父の恋は実らなかつたのでした。

日中戦争が始まっていたとはいえ、私立の女学校。娘達の世界は、まだまだのんびりと華やかでありました。私が一番仲良くしていた鈴木さんは、先生方も一目置いている美人さんでしたが、高慢なところは少しもなく、それどころか自分を目立たないようにと気遣う様子さえございました。何故か私とつまが合い、少女雑誌を貸し合ったり、自作の詩を見せ合ったりして、お互いをスーちゃんヨツちゃんと呼び合う仲良しでした。

スーちゃんの美しさを、咲きかけの真紅の薔薇に例えるとするならば、スーちゃんのお母様は、朝露を載せた白百合のように美しい女性だと、母のいない私は、娘心にも密かに憧れておりました。

その美しいお母様は、ひとり娘のスーちゃんを大層可愛がり、お父様がお仕事で忙しく休日さえめつたにお家にいらっしやらない寂しさもあつてなのか、お休みの日には、スーちゃんと私、それに女中の春さんと一緒に、相撲やらお芝居見物に連れて行って下さいました。スーちゃん母娘は、すれ違う人々が思わず振り返る程の美しさで、ある時などは映画のスカウトマンが、家までついて来た程でした。

今となつては、いえ、老婆となつた今だからこそ、これも私の個性なのだ、苦にはしなくなりましたが、私の右目の瞼から眉にかけての銅貨程の大きさの、この黒い痣は、女学生だった私の心に、母の居ない悲しみと共に、『不幸』という名の黒い不吉な染(しみ)を作つておりました。私と初対面の人は、私の顔を見た瞬間、微かに動揺いたします。いえ、決して相手が言葉に現す事はありません。けれども私には感じ取れるのでした。『気の毒に』という無言の憐憫。私は、いつも気付かない振りをしながら生きて来たのです。痣がなかったとしても、お世辞にも美しい顔立ちではありませんが、鏡に顔を映すたびに人差し指で痣を隠してみるのも、当時の悲しい癖でした。人間にとって顔に痣があるという事は、決定的な不幸ではございません。世の中には、もっと多くの不幸が溢れておりましょう。けれども若い娘にとっての顔の痣は、自分の将来に暗い影を落とすのに十分な不幸と思われました。だからこそ私は、一点の曇りのないスーちゃんの美貌に憧れていたのでございます。

ある日、同級生数人で、おしゃべりをしておりました。女学校の五年生。卒業式を数日

後に控えていた、春まだ浅い日の放課後の教室でした。その翌年の暮れには、日本はアメリカと開戦しますので、日本を取り巻く国際情勢は日に日に厳しさを増しております。

シンと冷えきって薄暗くなった教室で、私達は将来の大課題である『結婚』について、他愛もない話をしていたのでございました。日本が国家の存亡をかけた重大局面にあるというのに、娘達は呑気といえば呑気。けれど私達は、お国のためにも良い子供を生まなければなりません。そのためには、良い結婚をしなければならぬわけですから、『結婚』について語り合うのも非国民とは言えません。

向かいの校舎の音楽室には灯がともり、合唱部員が練習する『蛍の光』の歌声が、ピアノの伴奏に乗って悲しいくらいに微かに、繰り返し繰り返し聞こえておりました。

『愛はあるけれども、貧しい結婚生活』と『愛情を感じられない男性との裕福な生活』のどちらかを選ばなくてはならないとしたら、いったい、どちらを選ぶだろうか…という娘にとっての永遠の命題について、私達は話し合っていたのでございます。

「私なら、貧しくても愛のある暮らしを選ぶでしょう」

愛子さんは、胸にまで届く長いお下げ髪の手を右手の人差し指に巻き付けながら、なんでもない事のように言っていたのけました。愛子さんのお家には女中さんが二人もいて、それこそ御自分が食べた後のお茶碗さえ洗った事がない彼女の白い指先を見る度に、私は、炊事や洗濯で荒れてガサガサの自分の手を、そっと隠すのが常でした。

「でも、貧乏だと女中さんなんて家に置けないのよ。アコちゃん、あなたが家事一切を、ひとりで出来るのかしら」

おっとりして夢見がちな愛子さんに、いつも辛辣なコメントを付け加える吉川さんは、しっかり者の級長でした。どちらかと言うと小柄な愛子さんと、大人の風貌の吉川さんは同級生というよりは生徒と保護者の関係にも見えませんでした。二人がとても仲が良いのも母娘のようで、微笑ましく思えるのです。

「そうね。困るわ。家の事は母にしてもらっしかないのかしら」

「あきれた親不孝娘ね。アコちゃんは、お母様を連れて結婚する気なの？」

吉川さんの一言で、私達は笑いさざめきました。そして女学校の卒業を間近に控えた私達にとつての『結婚』が、そう遠くはない身近なところまで迫っているのだと思われ、なにやら身が引き締まる思いがいたしました。

「ヨツちゃんなら、どうする？」吉川さんが、私に尋ねました。

「私は、結婚しないつもりだから…」

私の心の『黒い染（しみ）』は、結婚を拒絶しておりました。私は、好きだった洋裁の技術を身に付けて、独りで生きて行こうと、誰に言うともなく決意しておりました。

「どつして？ヨツちゃんなら、しっかりして家的事もなんでも出来るし、きつと良い奥様になれるでしょうに…」

残念そうに吉川さんが言うつと、「あら、私の時とは随分ちがうのね」愛子さんが、プツと頬を膨らませました。その顔が幼くて可愛くて、皆は又、ドツと笑いました。箸が転げてもおかしい年頃だったのですが、卒業と同時に離れ離れになってしまう級友との最後の語らいを、笑いと共に胸に刻んでおきたかったのでございましょうか。

「私は貧乏はいや。愛情なんて貧乏の前では、きつと萎んでしまうでしょう。美味しい食べ物もなく、綺麗な支度も出来ないで、明日のお米の心配ばかりしているのなら、愛情なんて幻想だったと後悔するわ」

リアリストの和子さんが言いました。和子さんは、ちょっと冷めたところがある人でした。私達の女学校では、毎月第一月曜日が『日の丸弁当の日』と決まっておりました。この日は、戦地でご苦労をなさっている兵隊さんに感謝して、御飯に梅干しを一つ乗せただけのお弁当を持って来る日となっていたのです。愛子さんでさえ、この日はかりは我慢して、『日の丸弁当』を持って来ているのに、和子さんだけは、御飯の下に密かにコンビーフやら煮豆などのお惣菜を忍ばせていたのを、私は知っておりました。

「鈴木さんは、どつ思います？」

吉川さんは、スーちゃんと御近所で小学校も一緒だったというのに、何故だかよそよそしい口の聞きかたをするのでした。

スーちゃんは、ちょっと、ドギマギとした様子で下を向いてしまいました。私達は皆、何をおいてもスーちゃんの意見が聞きたかったのでございました。と言いますのも、この学校の独自の国語教師が、数日前にスーちゃんにプロポーズをして、見事断わられたとの噂が学校中に広まっておりました。私でさえ知らなかったこの『事件』。噂の発信源は、この教師に片思いをしている四年生でした。そのせいかスーちゃんは、ここ数日元気が無く、休み時間も一人で物思いにふけっている様子で、私も心配しながらも遠慮して、聞き出せずにいたのです。事の真相を知りたい私達は、興味津々といった様子で、スーちゃんの言葉を待ちました。

スーちゃんはいつになく、ちょっと掠れた声で、しかしきつぱりと言いました。

「愛情のない結婚生活は、オアシスに辿り着くあてのない不毛の砂漠を、たった一人で旅するのと同じだと思つ。愛情がない事よりも、お金がない事のほうが、はるかに救われ

ていると思うわ」

「いったい何が、十七歳のスーちゃんに、こんな言葉を言わせたのかと、私はちょっと意外でした。けれど…ああ、『息を飲む程の美しさ』と表現する月並みを、お許し下さい。瞳の長いスーちゃんの伏し目がちの横顔が、黄昏てゆく教室の中で、妖しいまでに白く輝いて見えるのでした。皆同じ思いであつたのでしょうか、私達はしばしの間、沈黙しておりました。」

「ねえ、鈴木さん。国語の古谷先生が…」和子さんが痺れを切らして沈黙を破つたその時、教室のドアが開きました。私達はスーちゃんを呼び出しに来た担任教師に追われるように、放課後の教室を後る髪引かれる思いで、後にしたのでした。

『スーちゃんが、お嫁に行く…』という知らせは、突然、吉川さんから届けられました。それは、卒業式から十日と経っておりませんでした。

夕暮れ時でございました。私は洋裁の教室に通い始めておりました。五時頃でしたか、家に着くと、枝折り戸を開けた玄關脇に、吉川さんが一人佇んでおりました。父もまだ帰っていない時刻でした。白の長袖ブラウスの上に、淡いグリーンのカーディガンを羽織つた吉川さんの顔は夕日に映え、大人の成熟した女性に見えました。

玄關脇に植えてありました雪柳の、細くしなやかな枝に咲いた可憐な純白の花が、春の芳香と共に、微かな風に揺れておりました。その雪柳は、母が病死した年に父が買い求め玄關脇に植えたのです。別名を『こごめ花』と申しまして、米粒の様に小さな白色五弁の花が、枝にびっしりと咲くのです。散り際は、風に揺れる度に、はらはらと、まるで雪が舞っているかのよう…。父は雪柳の花に、病弱ではかなく逝ってしまった『ゆき乃』という名の、妻の面影を重ね合わせていたのでしょうか。私も毎年、この花が咲く頃になりますと、母のちょっとした仕草や表情などが、不思議と思いつくのでした。

「鈴木さんが昨日、家に来て…これを貴女に渡して欲しいって」

吉川さんは遠慮がちに、分厚い白い封筒を差し出しました。その時私は、なぜか渡された手紙よりも、吉川さんの顔ばかりを見詰めてしまいました。吉川さんは美しく眉の形を整え、薄化粧をしているようでした。卒業して数日の間にすっかり大人びてしまった吉川さんが、眩しくてなりませんでした。私には、思い出の中に母が居るだけで、このように娘の身嗜に気を配ってくれる『実際の母』はいないのだ…という事実を、この時はつきりと思い知らされた気がして、化粧もせずに、眉の形もそのままの自分が、情けない程、醜く思えたのでした。

「突然の話で、私も驚いたのだけど…鈴木さん、昨日、引越しなさったのよ。満州にお嫁にいらっしやるらしいの。事情があるみたいで、涙ぐんでいたわ…」突然に親友を失った私を氣遣ったのでしょうか、吉川さんは雪柳の枝に視線を落としながら言いました。満州?…お嫁?…何故?何故?!。私は金縛りにあったように立ち竦み、言葉もありませんでした。「また近いうちに映画でも観に行きましょう」と言い合って分かれた卒業式が、まるで遠い昔の事のように思い出されるのでした。

「ヨツちゃん…私、いつでも相談に乗るから…。気を落とさないでね」

「ありが…とう」

こちらを振り返りながら、心配そうに立ち去る吉川さんの背中が茜色に染まり、やがて見る間に暮色に沈む街の中へと、消えて行きました…。

『ヨツちゃん、ごめんなさい。貴女に黙ってお嫁に行く事。何度も相談しようと思いがら、とうとうこの日が来てしまいました。私には貴女に、私の本当の姿を見せる勇気がなかったの。』

吉川さんが、私によそよそしい態度を取る事に、ヨツちゃんは、氣付いていたのでしょうか。家も御近所で同学年の私達二人は、小学校の低学年の頃迄は大の仲良しでした。けれどもお互いに大人の世界を理解する年齢になり、吉川さんは離れていったのです。

私の母は妾です。小商いをしていた父は、私が生まれて間もなく、病死したそうです。身寄りが無い母が、赤ん坊の私を抱え呆然としていた時に、父の仕事の仲間だった『おじさん』が、私達母娘の面倒を見て下さるようになったのです。そんな事とは夢にも思わなかった私は、実の父親だと信じて成長したのです。けれども、よその家のお父様は毎日日が暮れると家に帰って来るのに、私のお父様は何故帰ってこないのか?「お仕事が忙しいからなの」と答える母は、苦しそうで、それ以上は聞く事が出来ませんでした。いつもは陽気な春さんも、こんな時は、困ったような顔をして黙ってしまふのでした。

ある日、母と銀座に買い物に出た折り、年配の女性と一緒に、女学生位のお嬢さんを連れていた男性とすれ違いました。小学生だった私と手を繋いでいた母の体が、一瞬緊張したのが分かりました。その男性は『私の父』でした。父も氣付いた様子でした。けれども私達母娘は、父に氣付かない振りをして通り過ぎました。私は胃の中に無理やり棒でも飲まされた様な違和感で、ぎこちなく歩いたのでした。その日から私の中で、『父』は『おじさん』になりました。やがて私達母娘の存在は奥さんの知るところとなり、『おじさん』も母も随分苦しんだ時期があったようです。

実は私の結婚は、この奥さんによつて強引に勧められた縁談なのです。成長した私の写真を隠し持っていた夫から密かに奪い取り、満鉄の重役をしている彼女の従兄弟に『嫁入り先』を頼んだのです。この縁談を貰った男性は、現地の人間を何人も雇つて商売をしている実業家で、初婚とはいえ私よりも二十も年が離れているのです。私の写真を一目見て気に入つたと言う事で、私が女学校を卒業する日を待っていたというのです。私自身、この話を母から聞かされたのは、卒業のひと月前でした。私は寒気がしました。

満州での商売も関係している『おじさん』が、妻の従兄弟に頭が上がらないのを知つての上で、仕組まれた妻からの復讐なのです。

大人は汚い。皆嫌いです。私はまるで、猫の子のように貰われて行くのです。奥さんの復讐の道具にされたのです。私の運命が、私の意志など構わずに決められてしまいました。母は何故、毅然と娘を守ってくれないのでしょうか。『おじさん』からの保護を受けるために、娘を差し出したのです。

けれど私も、そんな母を責める資格はありません。この話を断つて、ひとりで生きて行く勇気がないのですから。

ヨツちゃん、私はこれから『私の結婚』をするために満州に渡ります。相手の男性を愛せるのかも分からないまま…。あの日、放課後の教室で、皆で話し合つた『結婚』。私の言葉を思い出して、貴女は笑つてでしょうか。それとも泣いてくれるのでしょうか。

さようなら。御自愛下さい。貴女ならきっと、良い結婚が出来るはずです。

再見（また会いましょう）！』

スーちゃんの右肩上がりの、見慣れた文字が並ぶ手紙を泣きながら読みました。私は、自分の不幸にばかり気を取られ、スーちゃんにも不幸がある事など考えもしなかつたのでした。今思えば、私とスーちゃんが不思議と気が合つたのも、互いの不幸が底辺にあつたからこそなのでございましょうか。ああ…人は、その胸の痛みを隠しております。何食わぬ顔をして、学校に通い、仕事をし、御飯を食べ、笑い合つているのでございます。自分に与えられた不幸など、まるでないかのように…。不幸だ不幸だと言つて歩ける人は、まだしも幸せなのだと思います。

それ以降、二度とスーちゃんに会う事はございませんでした。いえ、正確には一度だけ、スーちゃんの面影に会つた事がございました。終戦間もない晩秋、闇米列車と言われた超満員の列車の中でした。四、五歳位の幼い女の子の面差しの中に、スーちゃんを見たのです。その女の子は、洗い晒した白いブラウスと赤いスカートをはいて、ドア近くの座席に

ちよこんと座っております。母親でしょうか、満員の人込みから女の子を守るように、女性がその前に立っていました。私に背を向ける位置でしたので女性の顔はわかりませんでした。色白で目の大きな、睫の長い女の子の顔立ち、スーちゃんに瓜二つでした。私の心臓の鼓動が、大きく鳴り響きました。女性に声を掛けようにも満員で身動きが取れません。列車が大きく揺れると同時にドアが開き、母娘は降りて行きました。後を追おうとして人込みを掻き分ける私の前で、無常にもドアは締められました。

今でも女学校から送られてまいります同窓会名簿には、スーちゃんの名前の横に『不明者』と記載されておりますが、スーちゃんは無事に満州から引き揚げ、あの美しい女の子を育てたのだと、私は信じております。

さて、私の結婚の話を致しましょうか。私の主人になる男性は意外にも、私の身近に登場いたしました。

私が二十歳の早春でした。よく、お芝居の脚本に『男、上手より登場』などというト書きがあります。ちょうどそんな具合に登場したのです。

私の家で使っておりますポンプ井戸は、井戸を挟んだお隣りと共用でございました。お隣さんは、近くの工場の経営者でした。子供のいない夫妻は、自分の家を独身寮として若い工員さん達を住ませておりました。

早朝、井戸で洗い物をしておりました私に、声を掛けてきたのが主人でした。数日前から見掛けるようになった顔でした。ポンプをガシャガシャと力強く押し、洗面器に水を張るとブルルと顔を洗いました。手拭いで気持ち良さそうに顔を拭き終わると「姉さん、郷里（クニ）はどこだい？」と尋ねました。浅黒く精悍な顔立ちをした主人は、笑うと出来る目尻の皺が、人懐こい印象を与えます。おかしな事を聞く人だと思いました。

「この家の娘です」と答えますと、突然笑い出しました。勘弁。勘弁…と謝りながら言いますには、主人は私をこの家の女中さんだと早合点していたのだそうです。実は一昨年の暮れに、父は再婚しておりました。一人っ子だった私に、親子ほども離れた弟が出来たのです。継母は遠慮なく、なんでもズケズケと言う人で言葉も命令口調。赤ん坊のオシメの洗濯から洗い付けなどの、辛い水仕事を私の仕事と決めておりました。主人が私を、この家の女中だと勘違いをするのも無理はありません。何故だか私も、つられて笑ってしまいました。不思議な事に、自分の顔の黒い痣を意識させられない出会いでございました。

昭和十八年といえますと、物資の統制も日に日に厳しくなり、兵役が免除されておりました学生さん達も、学徒出陣していった年でございます。若い男性は、次々と戦地に招集されて行きましたので、いずれはこの男性も皇軍に加わる身。毎朝のように井戸端で話しかけてくる主人を邪険にも出来ずに、話し相手になっていたのです。

主人との毎朝の語らいが、私の密かな楽しみになっていった頃には、私は主人の身の上について、あれこれと聞かされるようになっておりました。

主人は、私と同じ戌の生れ。群馬県は富岡の出身でした。富岡は関東平野の西の末端。明治五年にフランス人ブリーユナの設計で建築された赤煉瓦二階建ての富岡製糸場は、富国強兵策の一環として建てられた、わが国初の官営製糸場として、教科書にも載っております。主人は、もともとは富岡より奥の下仁田町の在。青倉村の初代の村長と尋常小学校長を勤めた家柄の出で、主人の曾祖父の名は、地元の郷土史にも記載されているということです。

この村長の跡取りの孫娘が、主人の母でした。乳母日傘で育った主人の母は、小学校に通うのに、他人の土地を踏まずに歩けた…という恵まれた境遇に育ったといえます。上級学校を卒業したインテリを婿に迎え、主人が生まれた頃に『没落』という荒波が一家を襲いました。当時の家長だった主人の祖父が、騙されて盲判を押し始めた事が始まりでした。田地畑を全て没収されてしまったのです。主人の父親は、沈没しかかった船から、まっ先に逃げ出しました。妻子を置いての離縁でした。親戚筋の年下の青年が、再婚相手となりましたが、借金が重なり、一家は夜逃げ同然に富岡に逃れて来たというのです。

悲嘆のうちに祖父母が亡くなり、主人が物心付く頃には、母は製糸場に糸取りの女工として働き、継父は日雇い仕事に出ていたそうです。主人は父親違いの弟と妹達の面倒を見ながら、小学校に通ったのです。赤ん坊だった二番目の妹を背負って、教室の一番後ろから授業を受けていた事や、むずがる赤ん坊が煩いと教師に怒られた時には、窓の外から授業を受けた事。授乳のために休み時間に、母が働く製糸場まで走った事。普段はおとなしい継父が、酒を飲んで暴れる事。弁当のない昼休みを過ごしていた事…など、主人の思い出話は、まるで私との共通体験の様に、心に染み込んで来るのです。

そして主人は十一歳の時、栃木県の足利にある呉服問屋に奉公に出たそうです。病気に罹った継父の治療に高価な薬が必要でした。貧しいその日暮らしの家には、出せない金額でした。実の父親でないとは言え、身重の母と幼い弟妹達のために、主人は自分の身を売ってお金を工面する決意をしたのです。

奉公先の朝は早く、夏は五時、冬場は五時半起床で、廊下の雑巾掛けで始まる毎日だっ

たといいます。真冬に水で濯いだ雑巾は、寒さのために廊下に吸い付きながら凍っていったそうです。夜十時までの夜なべ仕事は、朝の早い少年には辛い作業で、つい居眠りをすると、番頭さんが木綿針を少年だった主人の膝に突き刺すのだ…と聞いた時は、私は涙が出て、仕方ありませんでした。辛さのあまり、同世代の奉公人が逃げ出す中、前借り金を継父の治療代に使ってしまった主人は、歯をくいしばって勤め上げ、半年間の御礼奉公の後、紋付き羽織り袴を頂いて、年季奉公が明けたのが十六歳だったといっています。

主人は尋常小学校も満足に出ていない…という境遇ながら、短歌を詠んだり、詩を書いたりする文学青年でもありました。私の心の中は、いつしかこの青年の存在が大きく占めるようになっていったのでございます。

主人からプロポーズをされましたのは、知り合って一年が経とうとする冬の事でした。招集令状が来たのです。主人は私に「必ず生きて帰るから、待っていて欲しい」と言ってくれました。私の顔の黒い痣を、気にはおりませんでした。いえ、私が生きて行く事の悲しみを知っている女性だからこそ、生涯の伴侶に選んだのだと…。私は待つ事にいたしました。もしも二度と帰らなくても、この人を待ち続けるのだ…と、心に誓ったのでした。

昭和二十年の五月の大空襲は、三月の大空襲に次いで、東京を壊滅させました。私達一家は戦災に会い、無一文となって父の郷里の千葉の田舎に身を寄せ、終戦の日を迎えたのでした。そして、主人が抑留されておりましたシベリアから無事に帰還したのは、翌年の秋の事でございました。

再び春が巡り来て、私達は結婚したのです。「ヨッチャんは、苦労をしに嫁に行くよっちなものだね」言葉のきつい継母が、嫁ぐ私にかけた、この言葉は生涯忘れられません。お祝いの言葉ではありませんでした。そして父は、娘に何一つ満足な花嫁道具を持たせる事の出来ない自分の身の上を、恥じているようでした。結婚式を挙げる事もなく、千葉の田舎に迎えに来てくれた主人の許に、私は身ひとつで嫁いだのでした。

高崎駅で0番線の上信電鉄に乗換えますと、車窓から見えますのは、延々と続く桑畑。絹糸を吐いてくれる蚕の『養蚕』が盛んな土地柄です。遠くに見えていた山々も間近に見える頃、富岡の駅舎に着きました。私は不安と緊張で、改札の駅員にキップを渡す手が震えていたのを覚えております。これから主人の家に立ち寄り、結婚の挨拶を済ませなくてはなりません。両親に会った時の言葉を胸の中で反芻しながら歩きました。

主人の家は駅に近い、古びた二軒長屋の右側半分でした。がたぴし音をさせて玄関の戸を開けると、当時まだ小学生だった末の妹が、上がり口が続く、薄暗い三畳間にポツンと座って、ひとり綾取りをしておりました。

「かあちゃんは、どこ行った？」

「ただいま」も言わず、突然「かあちゃん」の居場所を聞く主人に、私の頬が緩みました。

「ねっねっ、あんちゃん。見て見て……アサガオ！アサガオ！」

太陽の光を背にして玄関に並び立つ私達二人に、眩しそうな視線を向けながら、妹はおどけた顔をして、赤い綾取り紐の中心を口にくわえ、左右の指で器用にアサガオのラッパを広げて見せました。「ちーこー！かあちゃんは！」痺れを切らして主人が尋ねると、妹は

綾

取り紐を脇に置いて、大人びた表情で答えました。

「八百屋のあんちゃんの結婚式の手伝い。父ちゃんは、結婚式のお呼ばれだって」

「しょうがねえなあ……」

主人が困惑した顔を見せましたのも、無理はありません。この日は、私達の結婚の日であったというのに、両親は御近所の結婚式に呼ばれていたのですから、なんとも皮肉な話でございました。

「姉ちゃん、あんちゃんのお嫁さん？だから、白い洋服を着てるの？」

この日のためにと、私は布地を買い求め、自分で仕立てた白いワンピースを着ておりました。髪にはパーマを当て、薄化粧をしたのが、精一杯の私の花嫁姿だったのでございます。私は手提げ袋の中から、東京の闇市で買い求めた揚パンの袋を取り出し、妹に渡ししました。「姉ちゃん、ありがとー」

妹はこの日、私から貰った揚パンが、どんなに美味しかったか、そして、この日の私が「舞い降りた天女のように」美しく見えたとお世辞ではありませんが、後々まで話してくれました。

両親への挨拶を後回しにして、私達は川沿いの崖に建つ農家の納屋に向かったのです。この河原からは、上州の山々が間近に見渡せます。一際高く聳え立つ稻含山に、軍艦のように平らな荒船。そして鋸のような妙義山の尖峰群の後ろから、残り雪を抱いたふたまたわりも大きい浅間山が、まるで覆い被さってくるかのように見えたのでした。

これから私達が暮らしてゆく土地の風は晩春を告げておりました。主人が指差す方角に目を向けながら、目前にやってきている新たな季節への不安で、春霞みの山々がいつそう霞んでいったのでございました……。

長々とした昔話にお付き合い下さいまして、ありがとうございます。私も少々疲れております。こうして目を閉じ眠りにつく時、最近はこのまま二度と目が覚めないかもしれないと思うようになりました。いえ。何も恐ろしくはありません。二十五年前に亡くなりました主人の許に、再び嫁ぐ日が近くなっただけのことでございます。

あの崖縁の納屋で産声を上げました長男は、苦学して教育大学を卒業し、今では地元の中学校の校長をしております。先日、校長室の本棚にあった資料を読んでいた折り、当地の小中学校歴代の校長名が書かれているその資料に、青倉村小学校の初代校長として、幼い日に父親から何度となく聞かされていた、父親の曾祖父の名を見付けた彼は、胸に込み上げるものがあった…と、しみじみと私に話してくれたのでございました。

(了)